

【活動テーマ/テーマ設定背景】

●テーマ：音

●設定背景：0歳児として初めて出会う様々な音。毎日園で過ごす中で触れる物から発せられる音や自然から聞こえる音など身近に溢れる音に親しむ機会も多い。お子様の音に対する興味の第一歩を見守り、身の回りの物や自然からの音が聞こえたときの反応の違い、探求の移り変わりを模索する。

【活動のために準備した素材や道具、環境の設定】

スピーカー、絵本、ボール、プラスチック箱

【活動内容/お子さまの声や姿や保育者との関わり】

●活動内容

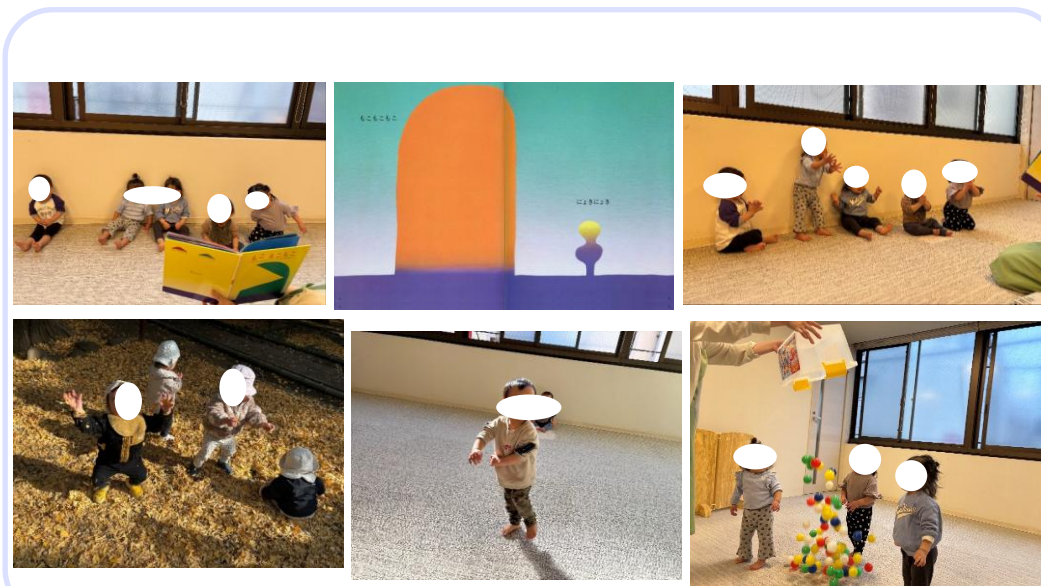
散歩先での落ち葉踏みや、ボールを投げる・箱を揺らす等の探索遊びに加え、絵本「もこもこもこ」を用いた音遊びを行った。

●お子さまの反応

葉を踏む音やボールが当たる音に繰り返し反応し、絵本の読み聞かせでは声の強弱に合わせて立ち上がるなど、全身で音を表現して楽しんでいました。

●保育者との関わり

日常の音に気づけるような声かけから、足踏みなどを真似することで音の発見を促した。絵本では声に大小の変化をつけ、視覚と聴覚を連動させた表現によって音の反応に気付くような関わりをした。



【振り返りをふまえた気づき】

今回「音」というテーマを元に子どもたちの姿をより丁寧に見守ってみると、まだ自分の気づきや思いを言語化して表現することが難しい0歳児クラスの子どもたちでも身の回りに溢れる「音」や時には「音の変化」まで感じ取っている姿が見受けられた。その表現方法は目を見開くような表情やあれ？という不思議そうな表情であったり、「うー」「うあー！」と声を張り上げてみたり、手や腕を動かして表現してみたりと様々であった。

日常生活の中での保育者の言葉がけや「何の音？」といった何気ない問いかけひとつで視覚的な情報だけでなく耳から入ってくる情報へと意識が向き、子どもたちの刺激になると感じた。今後も子どもたちの気づきを見逃さず、さらに広げていけるような関わりを行っていきたい。

【活動テーマ/テーマ設定背景】

●テーマ：音

●設定背景：身の回りの物から出る音だけでなく、動物の鳴き声、歌、など耳に入ってくる様々な音色の認識が出来るようになった1歳児クラス。理解できるようになった音色を戶外散策や施設内にある物から見つけていくほか、保育者の介在によって反応や関心を深めていく。

【活動のために準備した素材や道具、環境の設定】

スピーカー、廃材

【活動内容/お子さまの声や姿や保育者との関わり】

●活動内容

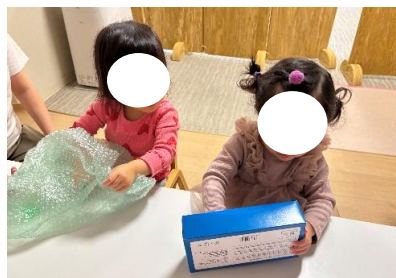
廃材や緩衝材を「叩く・丸める」等の自由な探索や、箱にビーズを入れる実験、音楽に合わせたリズム体操を実施。

●お子さまの反応

物同士が触れて鳴る音に気づき、箱を振って音がしないと「何もない」と推測するなど、物の中身と音の関係性に気付きながら探究する姿が見られた。

●保育者との関わり

「どんな音がするかな？」と問いかけながら様々な音に気付くことができるようにした。お子さまの「音がしない」というつぶやきから、素材を足して変化を見せるなど気づきから興味に移るような促しをした。



【振り返りをふまえた気づき】

毎日のように取り組んでいるリズム体操ではただ次々と保育者の動きを模倣するだけでなく言葉のリズムやメロディーを感じながら動作を切り替えるなどの姿が見られ、楽しく身体を動かしながら自然と音楽を感じている様子がうかがえた。

感じた音をどのような言葉で表現するかという部分では月齢差があるものの、各々が簡単な音や言葉で伝えようとする姿が見られた。箱と箱をぶつけるという同じ音でも、異なる単語や擬音で表現する姿から一人ひとり音の感じ方や受け取り方が異なっていることが分かった。保育者は皆同じ表現へ導いてしまうのではなく、個々がどのように音を受け取っているのかを探り、それぞれに合った表現のヒントを提供する言葉選びが大切であると感じた。

【活動テーマ/テーマ設定背景】

- テーマ：音
- 設定背景：日々の活動や夏の水遊びなどから、日々身の回りに様々な音があることを知り、またそれを自分たちで表現することに興味を持ち始めた2歳児クラス。聞いた音と自分で鳴らす音の表現によってお子様の興味がどこに向かうのかを探求していく。

【活動のために準備した素材や道具、環境の設定】

スピーカー、水遊び用ジョウロ



【活動内容/お子さまの声や姿や保育者との関わり】

●活動内容

動物の真似遊びや鳴き声クイズ、水遊びを通した「水の音」の観察など、お子さまが日常の活動の中で好きなことから探求を広げた。

●お子さまの反応

動物を「ぴよんぴよん」等の音で表現し、実際の動物の鳴き声も聞きながら「こんな声なんだ！」といった発見も楽しんでました。水遊びでは落とす高さや対象による音の差異に気づき、繰り返し試す姿が見られた。

●保育者との関わり

スピーカーを活用して「何の動物かな？」と問いかけ、音のイメージを具体化させた。水面の音の変化に気づけるよう環境を整え、自発的な探究活動を見守った。

【振り返りをふまえた気づき】

物と水を流すジョウロの距離によって音が変わっていることに気づいた際も、「近くから流しているからかな？」と言葉にしてしまうのではなく、「この音の時はじょうろのはどこにある？」などヒントとなりそうな質問をすることで、子どもたちの発想の手掛かりを提供することが出来た。

保育者がただ鳴き声を伝えるのではなくスピーカーを通して臨場感のあるよりリアルな鳴き声を聞きより動物へのイメージが具体化されていた。

2歳児クラスになると、ただ音の変化を感じたりするだけでなく、どうして変化したのか疑問を抱くような姿が見られた。そこで保育者がすぐに答えを与えてしまうのではなく「どうしてだと思う？」という問いかけを挟むことで、子どもたちが自分で考えるきっかけとなり、重要な声かけであったと感じたので、今後の活動やかかわりに生かしていく。